小山工業高等専門学校研究紀要
第四四号（二〇一一）　一八三―一九二

# 史料紹介　暇之記　―下館藩主　黒田直邦による正徳三年の記録（一）―

酒入　陽子[*1]

## Historical Material　―“*Itoma-no -ki*” written by KURODA, Naokuni―

Yoko SAKAIRI

The old document named “*Itoma-no-ki*” was written in 1713, by Naokuni KURODA, the Feudal Lord of Shimodate. This modest contribution of “*Itoma-no-ki*” assists in further analyzing the relationships between different regions in the Edo period.

KEYWORD：Historical Material, Edo period, Shimodate

## はじめに

「暇之記」は、国立公文書館内閣文庫所蔵の江戸時代の記録である。執筆者、成立年ともに明記されないが、その内容から、下館藩主黒田直邦による、正徳三（一七一三）年の参勤交代時の記録であることが判明する。直邦は、将軍綱吉・吉宗に重用された大名で、「先代旧事本紀大成経」の注釈書「鳴鶴鈔」等、多くの著書を残す学者でもある[1]。

本史料は、下館での生活や、外出先で見聞きした事への感想、家臣とのやりとり等が、大名である直邦自身の手によって率直に記されており、興味深い。また、菖蒲の節句や木綿晒しの様子、砧を打つ情景など、当時の下館周辺地域の人々の生活が細やかに描かれ、地域を知る史料としても大変貴重である。さらに、学問好きの綱吉に寵愛された直邦の、政治的立場や儒学の素養、荻生徂徠や林信篤との親交も垣間見られ、本史料の史料的価値は高い。よって全文を翻刻し、本史料を広く紹介したい。ただし、紙面の都合上、今回は、江戸を出発する前日の四月一四日から、下館での菖蒲の節句の様子を記した五月五日までの記事を紹介する。

なお、「暇之記」、直邦については、拙稿（「下館藩主黒田直邦の暇―正徳三年「暇之記」に見える黒田直邦―」『小山工業高等専門学校研究紀要』四二号、二〇一〇年）で考察している。併せて参照していただきたい。

## 凡例

一、「暇之記」は、国立公文書館内閣文庫所蔵の写本を使用した。縦帳、七四丁。表紙に「暇之記」、内表紙に「いとまの記」と記される。

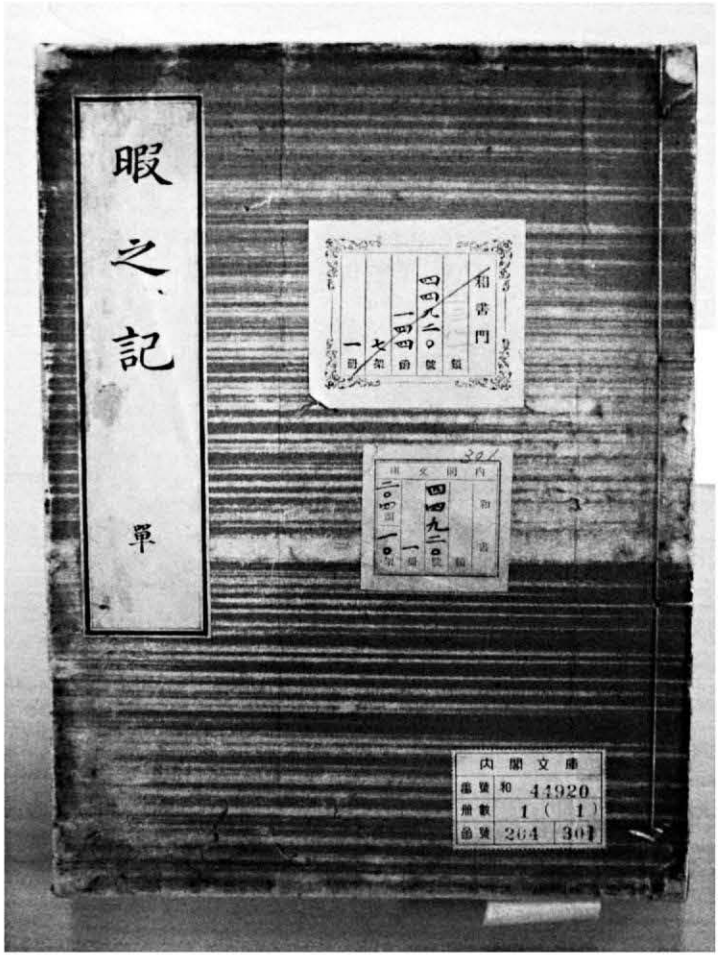
一、読みやすくするため、原文に次のような修正を施した。

1．行改めは原文と一致しない。

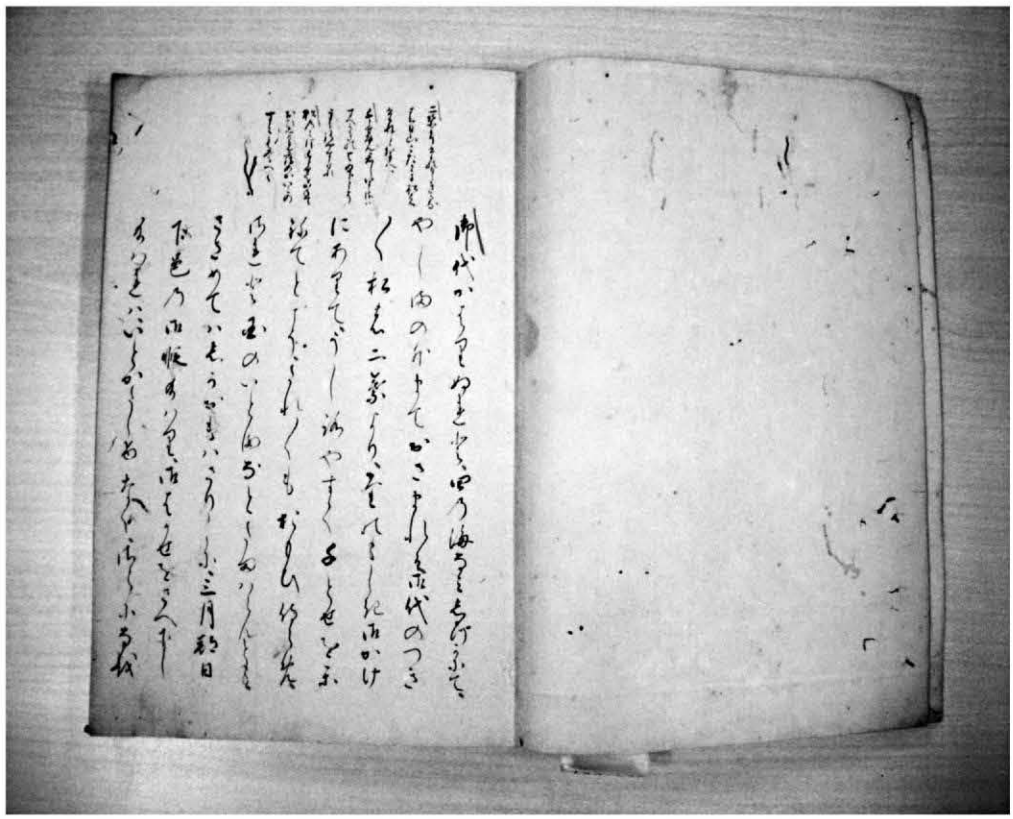
2．変体仮名は平仮名に改めた。

3．漢字は、原則として原文のままとしたが、異体字や旧字等は適宜残したものもある。

4．意味判読上必要と思われる場所には、読点「、」を加えた。




「暇之記」表紙



「暇之記」始めの部分

5．濁点・半濁点を適宜に施した。
6．原本にある濁点には、傍点「・」を付した。
7．慣用的に用いられているメ（して）・ゟ（より）、はそのままとした。ㄱ（こと）・ㄷ（とき）等は、平仮名に改めた。
8．踊り字・繰り返し符号は、漢字は々、平仮名は〳〵・〴〵、二字以上は〳〵・〴〵とした。
9．本文中に見える地名・人名・難解な用語等には、注番号（一、二、三…）を付け、末尾で説明を加えた。

## いとまの記

御代かはりぬれど、四の海なみしづかにて、やしまの外までおさまれる、御代のつき〳〵松は二葉よりたのもしき御かげにありて、そしろやすく千とせをかねてとこそ、だれ〴〵もおもひ侍らめ、されど国のいとまなどたまはらんとも、さだめては、しかおもはざりしに、三月朔日、下邑の御暇給はり、御はかせ二をさへ下し給はれば、いとかたじけなく、さらになをさき〴〵の御いつくしみのあつきをも引かさねおもふなるべし、前栽の花をみすてゝゆかば、本意なからんをなどおもひしに、これかれのがれがたき事のみうちしきりて、卯月の半ばに江戸を立ぬる、去年ははじめていとま給はりしかば三、いと事しげく、五月には日光を拝し、六月には先祖の廟四をとぶらふとて、中山へまうでしかば、しるしとらむべき事もおほかれど、いかゞしけんわづらはしくて、さもせざりしを、ことしだにとゞめをかざらむもくちおしくて、かたはらいたき事をのみ書つゞり侍る、あさてばかりいでたつと聞て、京極の何がし五のもとより、柳をわけて古詩一聯にそへておくりけるを、さしたる事にもあらねど、古人の風骨おぼえて、やみがたく一絶をむくゆ、

答下霊居士綰二翠柳一繋以二古詩一見レ寄

同心離別難回レ首路漫々

分レ手情猶伴柳枝挿二馬鞍一

おもひよる人もとひけり青柳の
いとにみだるゝ心ぼそさを

この歌をばそへざりしか、かへし

霊器拝

誰言行路難両地不二漫々一
渭水留二高曲一教三人憶二征鞍一

あすたゝんとての今宵、あひしれるものはなむけすとて来りつたふ、十四日の月、いとよくさえければ、

別離帰雁哀欄下月徘徊
再会秋期遠酔吟盡二一盃一

かへしもありけれど、とゞめずなりぬ、あすはいなんとてなごりおしめば、とくおきなむとて、むづかしくおもふもあるべし、秋はやがてかへる旅なれど、雲井はるかにおぼえて、老母おはしますをばかさとり山のとうじ路めたくおもひをきつ六、ねびの妻七、おさなきものなど、なごりおしげなるもいとおしく、いくとどまると心二つあるこゝちして、今夜こそひとへにおしきおもひそひながら八、明ればとく出たつ、十五日、けふはおほやけに御能ありとて、浅草寺のほとりまでは、大名あまたひきもきらず、さう〴〵しかりしに、千主九へいりては引たがへ、いとさびしかりける、江戸ゟをくれるものこれかれありしも、こゝよりかへるもあり、すぐにやすみまでくるも有、心ぼそくおぼえて、

名残なをおもひをくべきやとなれや

雲のゆく〳〵かへりみつゝも

千主の町を過てかちよりゆく、周盧一〇はいづくまでかをくるといへば、まづこのほとりまでと心ざし侍りしか、いざすこし先に大日如来をこんりうすといふをきけば、いとゆかしくなん、それ迄はともなはんといふ、それこそ去年みてしか、ゆかしからぬ所よとわらひてうちつれ慶琢一一が

さうかういひ、なぐさめてゆく、江戸をはなれては、なにとなく心はくつろぎぬれど、このみちすがらほどおかしき所もなく、おもしろきけしきもなきことよとてゆくに、藤の花さける家あり、小家の前七、八間ほどのあいだ、棚にかゝりて、しなへばさのみながゝらねど、さかりにうるはしければ、この下へたちよりて、そこゐもしらぬ一二、などうちすして、しばしながめおり、

藤の花、しばしとてみるたび人の
　ゆくてになどか、まつはれはをぬ

波におらるなどこそありしはおもふらめ、君とまれといふべくもなければ、やがてこゝをもうち過ぬ、かくて周盧が愛ひしける大日おはしますの所に来つきぬ、みたけは六、七尺ばかりもおはすらん、庄像の銅仏二躰おはします、胎金両部一三の大日尊也、世すて人のおもひたちて、年月をかさね、くはんじんするなり、本よりまた寺もなければ、みとゞむべきけしきもなし、たゞあやしきわらこ屋のうちに、御ぐしをさゝゆるばかりにすへ奉りて、心ざしのものゝ奉れるにやあらん、かゞみ・小刀・はさみやうの物、仏の前にいくつもあり、周盧もいとおもひの外にけうさたして、とてもこゝまでこしかば、やすみまでは供せんといへば、なをかたらひてゆく、両部の大日とはいかなるいはれにやと周盧がとふ、わぬし一四は儒学はすれど、仏のみちは、まだしらぬなるべし、いふともとみにはいかでかさとしぬべき、もとよりわれもしらぬみちなれど、いでや両部のわかればかりはあかしてむ、仏のみちにていはく、名目のたがひ有て、猶さとしがたからん、汝がこゝろうべき事によせてかたはしきこえむ、木火土金水の五行一五をばよくしる事よ、地水火風空の五大一六といふもおなじ事ぞ、五大といふもことやうにおもふべければ、たゞ五行とおぼふべし、仏の教には無尽の世界をたてゝ、此天地のみにはかぎらねど、これもしばらくこの天地の事に心うべし、さてその五行といふもの、あめつちのひらけはじまらぬさきより、やぶくのち迄つくる事なきものぞ、天地ひらけて雨とふり、川とながれてより水の生ずる事をしり、木にもえつき、金をとろかしてより、火の生ずる事をしり、枝葉をなし、土をうがち、ものたねおひいづるをもて、木金土の生ずることをしる、これらはみな今日の愚眼のみる所ぞ、太極より両儀一七にわかれ、五行生ずるといふは、ひとへに循環を越らふ、その一貫するよりいへば、まことは天地ひらけ、はじまらざるより両儀五行、森羅万象あり、是を道の極とす、程伊川一八の冲漠無朕にして万象森能として具るといへるは一九、両儀五行はいふにおよばず、今日の森羅万象、およびそのみち〳〵まで、天地ひらけざるさきより、みなそなはりてあるものとぞ、森羅万象とはいへど、みな五行にあらざるものなければ、ちかくこれも五行に約してこゝろうべし、この五行にいづくまでも融してゆきいたらぬ所なきもの有、又いづく迄も堅して、変じかはらぬものあり、その融していたらぬ所なきものは、天地の間にみちふさがりて、髪一寸しもいれぬものと、汝が愚眼をもてみれば、空はたゞ空とのみこゝろへ、水の中に火もなく、火の中に水もなし、かしこき人のこゝろには、空中に五行あり、金石のかたき中、塵芥のわづかなるうちにも、みなゆきわたる、五行の水火木金土、又たがひにゆきわたりて、をの〳〵五つのみちをそなへてさはる事なし、その変ぜざるものよりみれば、水は天地のさきより水、やぶれて後も水、火は天地のさきより火、やぶれてのちも火、木金土もおなじこゝろ也、こゝにいたりて顕教の諸大乗の宗門、および儒教道家のこゝろえと、真言密乗とたがひあるべし、かく天地の間に融するものと、不変なるものとおもむきにみちあるがごとくにて、融するものはあまねく平等也、不変なるものはこと〳〵差別す、その平等なるを体とし、差別なるを用とす、また差別するよりみれば、不変なるは体にて、融するは用なり、倶体倶用なれば、一つにして二つ、二つかとおもへば一つなり、その融するものをもて胎蔵界の大日如来とし、不変なるものをもて金剛界の大日如来とす、胎蔵とははらみおさむるこゝろ、金剛とはかたくしてやぶるべからざるこゝろ、これを両部の大日とす、なをこの体用一、二のことはりは、くはしき事ありぬべけれど、まづこれ程にこゝろえおらん、かの五大五つにわかれたるを五方の仏として、中は大日、東方は阿閦、南方は宝生、西方は弥陀、北方は釈迦なり、これを五智の如来二〇と云、儒学のちからにても、こればかりのことはりはさとしぬべきぞ、我もよくはしれぬことぞなどいふ程に、草加といふ所

にいたりぬ、こゝにて馬つぎ、足やすめていづれは、清き川有、とへば
あやせ二と云、風よきほどにふきて、さゞなみよりくるに、岸をのぞみ
てみれば、ちいさきいをどもあつまりて、うきしづむ、みわたしに木の
枝折あつめて、あやうくわたせる橋も有、絶句うかびぬれば、かごの
やたてとり出、したゝめて、周盧にみす、

辞レ家　数-里　趁二前-程一　綾-瀬　風-涼　碧-浪　平
行-容　躊-躇　土-橋　上　江-頭　暫　見二水-魚　驚一

周盧かへし

今-日　送レ君　数-十-程　無-邊　綾-瀬　江-頭　平
金-鞍　繋-得　藤-花　下　国-境　亦　看　鳥　不レ驚

藤のうるはしかりしを、なをわすれがたくおもふなるべし、昼のやすみ、
こしがべにつきぬれば、こゝにてしばらくやすむ、をくりきぬるものも、
爰よりみなかへりぬべし、こしかべを出るより、いと心ぼそく、まこと
に旅たちぬる心ちぞする、さしもあらぬ木草の色もあはれふかく何とな
き道しばの露に心をなやまして、やゝ過ゆくまゝに、母君はゝからのも
とよりをこせ給はりし人には、などかもとくはしくもきこえざりし、常
盤橋三よりをくりこしものはとてかへりしか、この事かのこと、なをき
こゆべかりしをなど、やくなき事までとりあつめおもふ〳〵過ゆく、
粕壁・杉戸にて、馬つぎ、こゝはいづくと、かしこは何とかいふぞ、な
どとひゆくに、本郷三と云所に来ぬ、母君のすみ給ふ里の名とひとしけ
れば、

離二別　老-親一　随二緑　疇一　慈-恩　却　作二寸-心　憂一
如-今　忽-至　本-郷-里　将レ問　萃-堂　安-静　不

名をとへば、わが古郷のこゝちして
駒ひきかへし、ゆかまでもほて

その夜は、幸手にとまりぬ、所をきにものどもとり入れて、いとゞらう
がはし四、かたり合すべき人々なれけば、草の枕の露も涙も、とくおき
かへり五、明けばそこを出たつ、
十六日、夜の明けゆくさま、旁かくれにみゆる木立むぎのみどり、つらを
そろへていつかをきけん露の玉うきて風になみよるなど、あはれすくな
からず、くりはしのわたりに来てまず跡さきなるものみなわたしはてゝ
ぞ、みづからもわたしぬ、とてもわたりぬべきに、をくれても残すべき
ものか、われさきにとみな〳〵きそひのる、こゝへよせと、いましは二六
など聲高にのゝしる、盲人のひとり旅なる、これもこのわたしへきたりぬ、
いづくへゆくものかととはすれば、出羽のものなるか、京へのぼりて今
かへる也といふ、はる〳〵と山川をこえて、盲人のひとり旅する事よと、
あはれと覚ゆ、ふつゝかなる下部どもは、そこのけよ、みなわたらんほ
どはなわたりそとせいす、ふびんの事也、とも舟にのすべしとて、下々
のわたる舟にてのせをくる、またつとめてなればにや舟もおほからで、
あまたゝひゆきかへりてぞわたしはてぬ、去年は豆州の何がし古河の城
主なれば七、みづから乗船をば、かれよりして、かこどもそろへ、まく
引廻しきよげにしたてゝ、重くだものをさへとりそへて出されしかど、
ことしは主かはりぬれば、こなたよりもさきにいなみていひてしか、舟
いでねば、つねのわたし舟に乗てわたす、中〳〵これもやうかはり、山
田やはせのわたしおぼえておかし、角田河ならねばことゝふべき都鳥八
もすまず、あとのしら波九ほどもなくてむかふにわたりぬ、川むかふを
中田といふ、こゝより馬にてゆく、左右につゞきて、なみ木の松、みどり
をならべ、枝をかはしたる中をとほるに、爰は石もなく、草かりわらはべ
の木の葉藪しく、まもなくやくとして三〇ひらふに、落はさへなくて、
はらひのぞける馬場をすぐるこゝちす、はるかに松のひさよりつくば山
のみゆれば、やゝちかづきぬる事をよろこぶ、上下の者にだて道具三一、
かさなどもたすれば、宿々にては手ふり、あしをそろへほとひやうしに、
聲をかけてかさ道具をもつ、いとてなれて、宿々の見物となる、これ松
なみのはる〳〵とみわたさるゝにみれば、はるかのさきへ過て、だれみ
るものもなけれど、なをかさどり具をふりまはし、なみをそろへてもちゆ
く、きのふより十五里ばかりのみちを来ても、つかれをおぼえぬにや、

かれらは、たゞかゝる事をつねのいとなみにもなぐさめにもして、世をわたる也、わらべしきたのしみなるべし、古河の町を過て、供人やすむとて、しばらく馬をとゞむ、こしかけてやすらふうち、かたはらなるむぎ田の中にものゝみゆれば、なにならんと身ちかきものぐしていきてみれば、あやしき田長、二人、三人入りゐてむぎの間にまめをまく也、とはすれば、むぎをかりとる頃、この大豆おひたつと云、わづかの地をもついやさず、しばらくのいとまをもおしみて、粒々辛苦する事よと、感ありてすぐ、その畑の中にやゝ高き塚あり、みちの程とをからねど草高く生ぬれば、人をはしらしてみす、とくかへりていふをきけば、わざとつける塚にもあらざるべし、つき山ほどなるかたはらにふかき穴あり、狐などのすめるならんと云ことなる事もなければ、あきらめず過ぬ、そこをたちて、かごにてゆく、野木にて馬をつぎ、昼のやすみ侭田へつきぬ、こゝにしばらくやすみ、あすはおほやけの御精進なれば三二、御ゆるしはあれど、暮ぬさきにいきつきなむとす、小山の宿へ二、三町ばかりのほどにて、白髪のひげある翁、馬をひかせてこなたさまへくるもの有、だれならんとおもふなどに、弓同心あづけをける楪田何がしがむかひに出たる也、歳は八十におよびぬれど、猶をこ三三にみえて、朱さや、金つば、赤さげを三四など、しやうぶづくり三五を十もん字によこたへ、ひげは五寸あまりにのびて黒きすぢなければ、ひとへに五月おさなきものゝもてろうするかぶとのおもてをみるがごとし、下館にことなる事なきよしを云ひ、者ども帰城を侍うくるなどいふ、小山を過てより、むかひに出るもの、つぎ〳〵出むかふ、結城三六を過、小川のわたしに至りぬ、これより領地なれば、いと心やすく、手船出しをきぬれば皆わたすほど、これに乗て舟に酒肴をもうけたれば、ぐしたるものに酒たうべさす三七、川つらは、目のかぎりながれつゞきて、すゞしき石川三八也、水ぞこにいをどもうちむれゆきかふもみゆ、こゝをかよふ舟は、かうかいと云ものして、水をさぐりて舟をばこぐ、風よければ帆をあげて乗り、風なくて水かさひきければ綱にてひき上す、きぬ川三九と云も此川也、ひろき河原つゞきに、山はやしみわたされて、け色おもしろき所なり、むかふへわたりてかちよりゆかんとするに、やう〳〵日なゝめに落て申の時ばかりにやあらむ、城へは暮ぬべしやなどいへば、かごにていそぎゆく、去年は他郷よりも見物するもの数多来つとひてみえしか、ことしはさしもあらねど、こゝかしこ二十、三十、五、六十ほどうちむれ〳〵、田の中里はづれなどに男女のわかちもしれぬ、あかきかしらをならべたてゝいでゐる中に、あやしき化そうの物どもいふべきぞは、あまた手をひたいにあてなにごとにかあらむ、ぶつ〳〵と口さへうごくは南無阿弥陀仏といふにやあらん、おさなきものゝわらひゆびさしなどすれば、あれおかめ〳〵とぞいふ、うちゑみてみゆくに、また暮ぬほどに城にはつきぬ、

十八日、宵すぐるほどに、時鳥四〇それことばかり鳴すぐる、この程は聲もおしまざらんを、里をわくねこそいとつらけれ、あやしうみちにてもきかざりつることよ、

今ぞきく枝にねぬ夜の郭公
たゞ一こゑはさだかならねど

十九日、筑波四一をのぞみみて笙をふく、この山は冨士、あさまにならびてきこふる名山也、こゝよりは、みちの程三里にあまるといへど、さしわたしてみる所は、一里あまりもあらんやうにちかくみゆ、頂上は二峯あり、男体女体といふ、伊弉諾、伊弉冉のみやしろ有と云、その下、むまの背のごとく、いくつもみね有、むら〳〵松おほくみゆ、なかより下に松の森見ゆる所を椎尾四二と云、そのかたちこなたよりみれば、さながら虎のうづくまりて、峯などの上よりのぞみおるがごとし、此森のうちに堂あり、そのやねこなたよりは三、四寸ばかりのちいさゝに森の間よりみゆ、山のなだれたる尾に大なる杉あり、そこに至りては、おびたゞしき大木なるを、こなたよりはるかにみれば、高さ三寸ばかりに茶入などをすへたらんやうにみゆ、樹如レ齊と云るは、これをぞ云ならむ、林先生四三、徂徠翁四四がもとへ鄙律ををくる、

望二筑波山一吹レ笙

筑－波　雲－獄　秀二常－州一　佳－境　近－隣　無二敢テ儔一
椎－尾　虎－臨テ　闚コト二岸－下一ヲ　松－塘　龍－躍テ　臥ス二山　頭一

屯-綿蓋-戴雨新霽　長-帯縈-廻雲更幽
玉-鳳馳レ空幾-千-里　相-翔将三興化二仙遊一

このかへし、日数過てもて来ぬれど、あとより爰にしるしをきぬ、

奉レ和下豊州刺史丹-治君四五在二常州下-館城一被レ示詩-韻上

別-来隔-地二-三-州　知与二雲山泉石一儔
雅-会通レ情孤-枕夢　帰-心有レ待太-刀頭
笙鸞聲-遠鏘-々響　琴-鶴-堂深事-々幽
梅-雨満レ林新-樹緑　清-陰不レ改二舊時遊一

奉レ次下琴鶴君侯四六対二筑波山一吹レ笙瑶-韻上

筑-波形-勝擁二雄-州一　太-守風-流絶二匹-儔一
拄レ笏名-山来二案-上一　吹レ笙落-日照二楼-頭一
寧無二青-樹浮レ薺小一　應レ有二白-雲点レ岫幽一四七
人道神-仙難レ可レ到　看君燕-暇【脱カ】與レ誰遊四八

物茂郷【卿カ】再拝

廿三日、雨の中、ほとゝぎすしきりになく、

館中暮雨子規飛　流-血千-聲涙混レ衣
芳-樹良-田皆領-得　猶聞号-呼不-如-帰

この所に上館、中館、下館といふ有、これを館中といふなり、この頃の作も、こゝにまづしるしをかむ、

残鶯

残-花吹-盡聴二黄鶯一　銜レ葉覓レ香飛又鳴

仍栖二空-枝一如レ有レ恨　偏堪レ慰二我惜レ春情一

廿六日、折本四九へゆく、去年この山にてわらび折て江戸へもをくりしをおもひ出るに、ことしは江府を出たつ頃、去年よりをそかりしかば、わらびもすえならんとおもふに、雨さへつきてふれず、雨はらしてとて、けふ日もうらゝかなるに出たつ、城よりは一里あまりもあるら敷山へ入てみれば、おしはかりもしるくわらびはことゞくすえになりて、みな扇をひろげたらんやうになり、わづかに残るもあれど、やう〳〵四、五寸にいたらず、ほねなくて折をもせで過ゆく、供なる者こゝかしこ木陰にたち入て、指すぐばかりづゝもてくもあれど、ことにとりもあげず、山を過はなるゝほどに、五行川の上なる川あり所にて折遠渕といへるは、折もとなれば、おりとふちといはんをあやまれるなるべし、岸より下は一丈あまりもやあらんすゞしき流なるに、よしあしおほくはへしげりて、よしきり五〇といふ鳥の口まめにをやみなく鳴ぞ、いとかしかまし五一、岸のほとりにあやしき茶のみ所しつらひをけるに入て、そこにしばらくやすみおる、むかふはまたたかからぬ松ばやしに、田はたのかぎりつゞけり、むぎはみどりのむしろをしきたるやうにみゆる、ひさ〴〵うへぬ田のまじはれるも、みどりのあやにみなされぬ、はるかのむかふは神波山、あさひき、小栗山五二などみえて、つくばは森のかげにかくれぬるこそいと本意なけれ、笙をもたせぬれば取いでゝならす、わりこ五三やうのものとりまかなひ、供なるものに酒たうべてみる、江戸にこれば かりの所あらましかはなど用なき事もいはねば、いふべき事のなきまゝにいひつゞく、供なるちかみつ五四からうたつくりてみす、

親誠拝

行-路攀レ林到二岸-頭一　欄-前流-水自悠-々
君鳴二鳳管一松-堂裏　待看魚-鱗-欵々浮

岸のほとりに竹のらち五五ゆふたるを、欄前とは云なり、和し、

折本里-亭臨二浪-頭一　神-波-山-色靄-烱悠
金聲佳韻応二瑶管一　林-葉飜-飛水-上浮

とりあへずいはんとするにぞ、いとゞきゝにくきや、されどしらぬものゝかぎりなれば心やすし、日やう〳〵かたぶきぬれば、かへさばはじめこぬかたをゆかんとするに道二つ有、山につゞける高みは、去年もとおりぬれば、流れにそふてゆかんとするを、あないの者がみちあしことといふは、ほそ道也と云なり、ほそみちこそおもしろからんを、もしやさきにゆきどまりも有にやととへば、さはなしとこたふ、去年うへのみちをとをるとてはるかの谷に見おろせたる河原に出、田みちを過、川にそひてゆく、おなじ川筋のかちわたりする所有、そのほとりに小石をたひらかにつみならべたるやうなるを、水のながるゝ、いはんかたなしおもしろし、よき頃にさゞなみたちて、ゑにうきたらんやう也、みぬ人にみせまほしくおぼゆ、芝まのすこしくぼかなる所に水たまれり、みなとびこえてゆく、昌伯五六がとぶとてみちわろきかたへかゝりけるが、すべりてあふきさまにこけぬるをみな〳〵わらふ、せいひきければみにくからずといへば、袖をぬらさぬやうにこけたるはと、ひけぬがほにいふもおかし、あないがわろきとつぶやくも有べし、なをゆきもてゆくさきに、つねははしある所なるを、このほどの雨にながして橋のげた計残れり、この川をわたらねばゆくべきやうなし、路へかへらんもはるかなり、往来の者はかちわたりにする浅き川なれば、たゞかちわたりにせよやと云、まづわたらせてこゝろむるに、わづかひざぶしつくばかりの水かさなれば、かちにてわたる、神山五七が七十にあまりてわたるを、意伯五八といふ医師と供なる者と左右にたすけてわたる、意伯は六十におよぶにや、うみ柿の熟柿といふせわおぼえておかし、川むかふの岸へあがりすこしゆけば、こゝに馬をひかへてゐたり、八丁五九の馬場にかゝりてかへれば、ここより馬にてゆく、八丁は三町ある馬塚にて百八十間あり、八丁といへるはもとよりの名也、供ひらのせて二、三返乗こゝろみるに、この程の雨にて馬はおもはしからねば、これより暮程に城へかへりぬ、

二十九日、けふはわたくしの忌の日六〇なれば、毎月浄典寺、妙西寺六一の和尚をかはるゞ〳〵まねきてとき六二まいらす、曹洞宗の寺也、晦日なれど、小の月なればけふを用ゆ、

五月五日、けふはあやめのせちとて、いなかも軒ごとにしやうぶさし、おさなき者ははた立てもてさはぐ、門ごとにゆたしげに、はた、かぶとたてつゞけぬれど、みやこのありさまにはことかはりて、はたのよろしげなるは布、おほくはかみ也、かぶとゝいふものも、板一枚をたてものゝかたちにけづりいろゑて、おもてをかきたる也、これを宇都宮の町より越こす、いなかびてあはれにかゝるものはみやこもかくぞあるまじと覚ゆ、町をとをり過ては、民の家居はあさましげなるにも、けふはをのづからにぎはひて、家々ごとにしやうぶさしまぎらはす、げにこのしやうぶさしたるのみ也、わらやの軒にいとりあはせたるやうに、いとよくみゆ、

草しげみあやめもわかぬのきはにも
けふなかきねをふきぞかさぬる

## 注

一　直邦の著作は、現在確認されているものだけで七点にのぼり、その内容は、政道書や儒学、和歌、儒仏神三教一致思想に関するもの等である。「暇之記」のように日々の生活を記すものは他に例がない。

直邦の経歴を「寛政重修諸家系譜」により以下に記す。寛文六（一六六六）年、中山直張三男として誕生。初名直重。母方祖父、館林藩家老黒田用綱の養子となり、黒田姓を名乗る。幼少より徳川綱吉に仕え昇進し、元禄一六年下館城主一万五千石（後二万石）の大名となる。綱吉没後、家綱・家継の両将軍下では役職から離れ、吉宗の代に再び重用され、享保一七（一七三二）年、上野国沼田城主（二万五千石）となる。享保二〇年没。なお、黒田家に関する記録のうち、「御明細録」（『御明細録―上総久留里藩主黒田氏の記録―』、二〇〇六年）、「雨城廼一滴」（『雨城廼一滴―上総久留里藩主黒田氏の記録―』、二〇〇九年）、「黒田家臣傳稿本」（『黒田家臣傳稿本―上総久留里藩主黒田氏家臣の記録―』、二〇一〇年）が上総古文書の会により編纂、発行されている。

二　はかせ…佩刀（はかし）の変化したもの。貴人の太刀を敬っていう語。（『日本国語大辞典〔縮刷版　第一版〕』小学館。以下、『国』と略す。）

三　正徳二年に初めて暇を賜る（「寛政重修諸家系譜」「御明細録」等）。

四　直邦先祖の墓は、武蔵国高麗郡加治郷中山村能仁寺（埼玉県飯能市）にある。中山は、鎌倉時代に台頭した武蔵七党の一つ丹治党、中山氏

の本拠地。中山氏は直邦の生家で、直邦自身も「丹治中山」を称す。中山村を含む高麗郡は、宝永四(一七〇七)年に直邦に与えられ、江戸時代通して黒田氏の領地。

五　京極某…直邦に親しい人物に京極高門がいる。高門の著書「曲妙集」後序は直邦が記す（茨城県立歴史館蔵「黒田直重文集」の中に「曲妙集後序」を載せ、「正徳五年秋八月朔旦　中大夫丹治直重」と署名する。直重は直邦の初名。徳川家重を憚り、享保九（一七二四）年に改名。）しかし高門を霊器、霊居士とする史料は管見の限り見当たらず、不詳。

六　かさとりやま…「笠取山と頼みし君をおきて涙の雨に濡れつつぞゆく」（「後撰和歌集」）

七　直邦の妻は、柳沢吉保の養女、土佐子。土佐子の記録に、「石原記」「言の葉草」等がある（柴桂子監修『黒田土佐子著「石原記」「言の葉草」―大名夫人の日記』桂文庫発行、二〇〇八年）。

八　今夜こそひとへにおしき…「夏衣立ち別るべき今宵こそひとへに惜しき思ひ添ひぬれ」（「拾遺和歌集」）

九　千主…千住のこと。東京都足立区。江戸時代、日光街道・奥州街道の一番初めの宿。日本橋から宇都宮までの宿は、千住―草加（埼玉県草加市）―越谷（こしかべ。埼玉県越谷市）―粕壁（春日部。埼玉県春日部市）―杉戸（埼玉県北葛飾郡杉戸町）―幸手（埼玉県幸手市）―栗橋（埼玉県久喜市栗橋）―中田（茨城県古河市中田）―古河（茨城県古河市）―野木（栃木県下都賀郡野木町）―間々田（俤田。栃木県小山市間々田）―小山（栃木県小山市）―新田（栃木県小山市羽川）―小金井（栃木県下野市）―石橋（下野市石橋）―雀宮（栃木県宇都宮市）―宇都宮。「暇之記」では直邦は、日本橋から各宿を通り小山まで行き、そこから街道を離れて結城、下館へと向かっている。

一〇　周盧…不詳。江戸住の黒田家家臣か。

一一　慶琢…不詳。黒田家家臣か。

一二　そこゐも知らぬ…「限りなき名に負ふ藤の花なればそこひも知らぬ色の深さか」（「後撰和歌集」）

一三　両部…密教における二大法門、金剛界と胎蔵界との併称。両界（『国』）

一四　わぬし…対等以下の相手に対して、主として親しみの気持ちで用いる。そなた、おぬし、わどの。（『国』）

一五　五行…中国で万物を変化させる五気としての木火土金水をいう。木火土金水は、元来は日常生活に不可欠な五つの物質であるが、転じてこれらの物質によって象徴される気、あるいはそのはたらきの意となり、いわゆる五行説として展開する。（『国』）

一六　五大…仏語。地水火風空の五大種をいう。万物を作りだす元素。（『国』）

一七　両儀…陰と陽。また天と地。（『国』）

一八　程伊川…程頤（ていい）のこと。程頤…中国北宋の儒学者。字は正叔。諱は伊川。天理と人性との関連を論じた人性学の基礎を築いた。その弟子の楊時の門から朱子がでた。一〇三三―一一〇七年。（『国』）

一九　「冲漠無朕、万象森然」…空漠で何のきざしもない天地開に、万物の将に生じようとする形象が森然と連なっている。無中に有あり、静中に動あること。「程子遺書」に「冲漠無朕、万象森然已具、未応不是後」とある。（『大漢和辞典』巻六、大修館書店）。

二〇　五智…仏語。大日如来が持つという五種の知恵の総称。密教で、法界体性智、大円鏡智、平等性智、妙観察智、成所作智の五つとする。（『国』）。五智の如来…仏語。密教で五智のおのおのを成就した五智如来。すなわち大日（法界体性智）・阿閦（あしゅく＝大円鏡智）・宝生（平等性智）・無量寿（妙観察智）・不空成就（成所作智）をいう。五智の仏。（『国』）。なお、直邦は、北方の仏を「不空成就」ではなく「釈迦」としている。また、「無量寿」は阿弥陀のこと。

二一　あやせ…綾瀬川。現在、埼玉県と東京都を流れる河川。

二二　常盤橋は、元禄八（一六九五）年四月二十五日に拝領した黒田家の江戸上屋敷のこと（「御明細録」）。東京都千代田区。

二三　本郷…直邦の母（慈光院）が、中山直好（直邦実兄）の本郷（東京都文京区本郷ヵ）の屋敷に住んでいたことは、土佐子の記録「石原記」に散見される。直好は、中山家当主で五百石の旗本。

二四　ろうがわし…混乱している。また、もの騒がしい。（『国』）

二五　草の枕の…「草枕結ふてばかりは何なりや、露も涙もをきかへりつつ」（後撰和歌集）

二六　今しは…（「は」は係助詞）今は。今こそは。（『国』）

二七　豆州の某…伊豆守松平信祝（のぶとき）。宝永六（一七〇九）年六月～正徳二年七月まで古河城主。その後、三河国吉田に転封。

二八　こととふべき都鳥…「名にしおはばいざ言問はむ都鳥、我がおもふ人はありやなしやと」（「伊勢物語」東下り）

二九 あとのしらなみ…「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあとの白波」（「拾遺和歌集」）

三〇 やくと…一つのことに集中して行なうさまを表す語。もっぱら。ひたすら。（『国』）

三一 伊達道具…華美をつくした立派な道具。外見を装った贅沢な道具。また、飾りやみえでおいてあるような武具。（『国』）

三二 公の御精進…家康の忌日。元和二（一六一六）年四月一七日没。

三三 をこ…愚かなこと。ばかげたこと。思慮の足りないことを行なうこと。また愚かな人。馬鹿者。（『国』）

三四 さげを…下緒。刀の鞘の栗型に通して下げる紐。軍陣の際、刀を上帯にからみつけるために用いる。（『国』）

三五 しゃうぶづくり…菖蒲作。刀身の切先の作り方の一種。横手筋のないもの。またその刀。（『国』）

三六 結城…茨城県結城市。

三七 とうぶ（賜・給・食）…「与える」「くれる」の意の尊敬語で、「くれてやる」動作をする人を敬う。上位から下位へお下しになる。下さる。お与えになる。（『国』）

三八 石川…小石が多く底の浅い川。（『国』）

三九 きぬ川…鬼怒川。結城を過ぎ鬼怒川より先が直邦の領地（下館）ということがわかる。

四〇 時鳥…ほととぎす。子規、郭公、不如帰。

四一 筑波山…男体山・女体山からなり、男体山頂に筑波男大神（伊弉諾尊）、女体山頂に筑波女大神（伊弉冉尊）を祀る。

四二 椎尾…茨城県桜川市真壁町。桜川上流、筑波山北麓の台地に位置。

四三 林先生…林鳳岡。諱は戇（とう）、信篤。字は直民。後に出てくる「祭酒林戇」も鳳岡のこと。祭酒は大学頭の唐名。

四四 徂徠翁…荻生徂徠。徂徠は祖先を物部氏とし、字は茂卿。後に出てくる「物茂郷」は「物茂卿」の誤りで徂徠のこと。この漢詩は、「徂徠集」に「次韻琴鶴君侯対筑波山吹笙」として載る（平石直昭編『近世儒家文集集成　第三巻　徂徠集　荻生徂徠著』べりかん社、一九八五年）。

四五 豊州刺史丹治君…黒田直邦のこと。直邦は、貞享四（一六八七）年に従五位下豊前守となる（「常憲院殿御実紀」）。刺史は国司の唐名。「丹治君」の右肩に、万年筆による「増山兵部少輔正弥」という書き込みがあるが、これは誤り。詳細は、拙稿を参照。

四六 琴鶴君侯…黒田直邦のこと。直邦は、琴鶴、瓊山とも号す。

四七 「徂徠集」では、「點」の字が「帰」となっている。

四八 「徂徠集」により「暇」の字を補った。

四九 折本…茨城県筑西市。小貝川支流五行川の中流右岸の高台に位置。

五〇 ウグイス科の小鳥。オオヨシキリは、水辺の葦原に住み五～七月に大きな声で「ギョギョシ」と鳴く。（『国』）

五一 かしかまし…声や鳴き声が耳ざわりなほど騒々しい。（『国』）

五二 神波山…加波山（かばさん）。茨城県真壁郡真壁町。あさひき…雨引山（あまびきさん）カ。茨城県桜川市。小栗山…茨城県筑西市。

五三 わりこ…（破子・破籠）ひのきの白木で折箱のように作り、内部に仕切りを設け、かぶせ蓋にした容器。弁当箱として用いる。（『国』）

五四 ちかみつ…大森親誠。黒田家家臣。直邦の葬儀一切を執り行なうほどの重臣（「黒田家臣傳稿本」）。「言の葉草」に「親誠といふは家の子にて故殿（＝直邦。翻刻者注）のそばちかうめしつかう給ひ」とある。

五五 埒…物の周囲に設けた柵。（『国』）

五六 昌伯…小林昌伯。黒田家家臣。「久留里藩制一班」巻三に「元祖昌伯宝永六（一七〇九）年外科被召出」とある（『久留里藩制一班　千葉県史料　近世編』一九九〇年、千葉県発行）。

五七 神山が七十にあまりて…神山安左衛門治栄。黒田家家臣で下館詰。享保三（一七一八）年には耆耋のため致仕し、同六年二月二日に老衰のため死去。下館の妙西寺に葬られる（「黒田家臣傳稿本」）。

五八 意伯…医師。不詳。

五九 八丁…茨城県下館市岡芹八丁台のことか。

六〇 私の忌日…中山直房（直邦実父直張の兄直守の子）の忌日か。直房は、宝永三（一七〇六）年四月二九日没（「寛政重修諸家系譜」）。本来は晦日（三〇日）が忌日だが、今月は小月（三十日が無い月）なのでこの日に行なうとしている。直房は下館城引渡の役も務めている。

六一 浄典寺…不詳。妙西寺…茨城県筑西市に所在する曹洞宗の寺。

六二 とき…斎。（食すべき時の意）寺で壇家や信者に供養のために出す食事。また法要の時などに壇家で僧、参会者に出す食事。（『国』）

※1　一般科（Dept. of General Education）ysakairi@oyama-ct.ac.jp

【受理年月日　二〇一一年九月三〇日】